

<追悼>早過ぎたご逝去

著者名(日)	田中 英史
雑誌名	Otsuma review
巻	25
ページ	25-26
発行年	1992-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00004347/



早過ぎたご逝去

田 中 英 史

池田先生とは多摩校で2年間ご一緒させていただいた。1988年4月、新設の多摩校で実務英語科の同僚になったときから、1990年3月末をもって私がそこを去り、千代田校にもどったときまでの2年間である。草創期の実務英語科の基礎固めを一緒にさせていただいた仲ということになる。それだけに先生の突然のご逝去はショックであった。

池田先生は多摩校開設のために大妻に招かれた先生方のおひとりである。開設準備の一環としての新任人事の過程で、当時上越教育大に勤めておられた先生のお名前があがったとき、私は最初、ちょっと耳を疑う思いだった。お会いした覚えはほとんどなかったが、お名前はよく存じ上げていた池田先生である。大学院レベルの学生の指導にも当たられ、充実した教育・研究活動をなさっているはずの先生に、来ていただけとは思えなかったからである。ところが以前から川崎にご自宅があった先生のほうでは、単身赴任の不便を解消したいというお気持ちも強くなっておられたようで、思いがけず承諾のご返事をいただけることになった。先生にとってはどうか分からないが、大妻のためには大変幸いなことだと喜んだものである。

多摩校開設にあたって、実務英語科を生み出す母胎になったのは、千代田校の英文教室であった。新学科の専任教員を決めるについては、全員が大妻への新任者ではまずいだろう、大妻の事情を心得ている者がひとりふたりは加わり、そのうちのだれかが最初の学科長を勤めるのが望ましいということになっていた。そこで、大妻での勤務歴が長く、多摩校開設のための委員などをやっていた私が、実務英語科の初代の学科長を引き受けざるをえない破目になったのだが、私よりいくつも年長で、しかもまだお元気いっぱい池田先生が学科の中にいて下さるので、いつも非常に心強い思いをした。

先生は大変温厚な方であった。学科会議などでも、しっかりした考えをお持ちになりながら、それを強く押し通そうとされるようなところはまったくなく、皆の意見をできるだけ生かそうとされていた。その悠揚迫らざる態度

は、均斉のとれた長身、面長で貴公子のような気品を帯びた風貌とあいまって、いかにも大人の風があり、私はいつも感嘆を禁じ得なかった。しかし、あるとき先生は、雑談の折にふと、「ぼくはとても気が短いんですよ」と言われたことがあった。意外であった。とてもそんなふうには見えない先生は、そんなにも自分をコントロールする修業を積んでおられたのかと、尊敬の念が倍加するのを覚えたものである。あるいは激しいものを内に秘めておられたのかと思う。多少思い当たるところがないわけでもないが、そうした幅とか深さとかいったものを備えておられるらしい先生に人間としての興味を一層かきたてられたと言っても、失礼にはなるまい。ただ、その興味を十分に満足させるためには、おつきあいの期間があまりに短かったのが残念である。

先生は酒もお好きであった。どちらかと言えば、日本酒党で、かなりお強かった。若いころは酒にまつわる武勇談もおありのようだったが、われわれとの席ではいつも穏やかで楽しい酒であった。テニスも2、3度一緒にしたが、年令のことも考えてかゴルフに熱を入れ始めておられたようだった。「ゴルフはいいですよ。始めませんか」と何回か誘っていただいたが、それは果たさないままになってしまった。

私が千代田校にもどるについて池田先生にあとを引き継いでいただくことになったとき、私は実務英語科がやっと本格的な学科長を持てるようになったことを喜んだ。その後の1年間は所属する教授会も違ったので、学校で直接お会いする機会は減ったが、私が前任であるからかときどき電話を下さり、あれこれの問題について大妻の慣例などを問い合わせる来られることがあった。あまりお役に立てたとは思わないが、こちらは先生のお声を聞くのが嬉しかった。学校の事情にもますます通じて来られていたはずなのに、学科長在任わずか1年でお亡くなりになってしまったのは、大妻のためにも残念でならない。

(本学教授)